

# AO入試に対する高校教師の評価 —「不合格」への視点に着目して—

望月由起 (横浜国立大学 大学教育総合センター 入学者選抜部)

本研究では、AO入試に対する高校教師の評価について、それぞれの高校の置かれた社会的文脈や重視する進路指導との関連を通して捉えた。中でも、問題点として多々指摘されるものの、大学側は看過してきた「不合格」への視点に着目した結果、偏差値上位校や中高一貫校において「不合格」への懸念が明らかにみられ、AO入試の評価も低く、生徒への受験も勧めていない傾向が示された。こうした高校の生徒が志望する可能性が高い国公立大学のAO入試においては、「不合格」への視点を取りわけ意識する必要があると思われる。

## 1. 問題と目的

受験競争の過熱解消、受験生の負担軽減等を目標とし、入試改革は長年にわたり議論され、近年の大学入試政策では、選抜方法や評価尺度の多元化が積極的に推進されている。その結果、「学力一斉筆記試験 (中村 1996)」以外の選抜方法を実施する大学が、近年、著しく拡大しているのは周知の事実である。

例えば、文部科学省によれば、推薦入学等の実施大学率は図1のように推移し、2006年度には、国立大学の86.8%、公立大学の95.8%、私立大学の98.7%もの大学で実施されている。

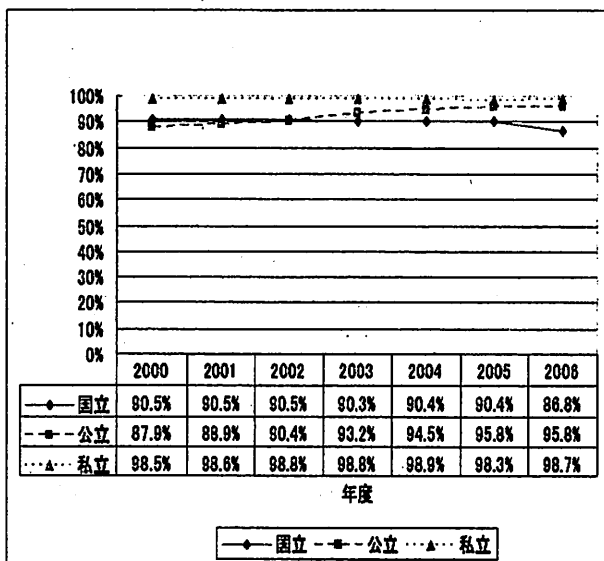


図1. 推薦入学等実施大学率<sup>1)</sup>

特別選抜入試の中でも、近年、その実施率

の増加が顕著にみられるのは、アドミッション・オフィス入試、いわゆるAO入試である。AO入試は、1990年に慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスで始まって以来、私立大学において徐々に取り入れられてきた。

他方、同時期の国公立大学の入試制度に目を向けると、共通一次試験を継承した大学入試センター試験を活用しながら、各大学が個別に試験を実施する方式が一般的であった。

しかし、1997年の中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」において、大学や高等学校の入学者選抜を「総合的かつ多面的な評価など、丁寧な選抜により行うこと」の必要性が謳われ、AO入試が「多元的評価による入学施策の一つ」として奨励されると、2000年度には、国公立大学でも実施されるようになった。以降、AO入試を実施する大学は年々増加し、2006年度には、国立大学の36.1%、公立大学の21.1%、私立大学に至っては68.8%もの大学で実施されており(図2参照)、2007年度には更なる増加が予想される状況にある。

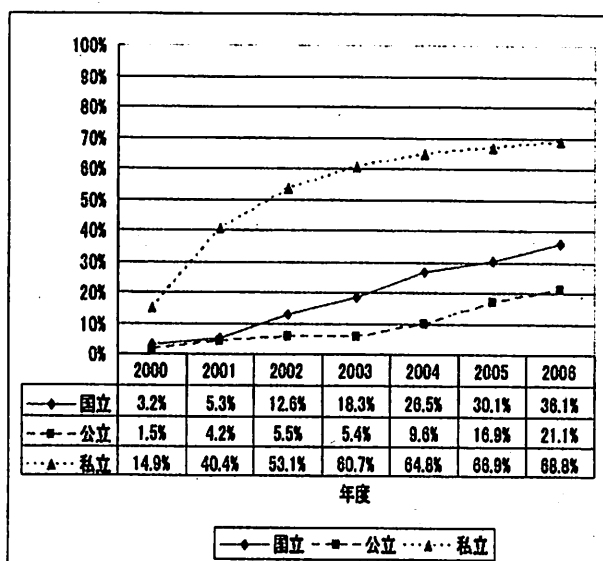


図2. AO入試実施大学率<sup>1)</sup>

こうしたAO入試の拡大に伴い、各アドミッション・センターや関係機関では、AO入試に関する調査を組織的・継続的に取り組み、「AO入試が勉学や大学院進学に意欲的な学生の獲得に有効である(例えば、山岸・加茂他2004; 渡辺 2005)」、「AO入試による入学者は他の選抜方法による入学者よりも、進学後の適応状況が良い(渡辺 2005)」といった成果が数多く示されている。

しかし、こうした研究は、志望する大学に入学した者を調査対象としたものであり、あくまで「大学側から」みたAO入試の成果にすぎない。夏目(2002)の指摘にもあるように、高校と大学の連携が重視される中、高校側の理解が得られる選抜、生徒に安心して受験を勧められる選抜のあり方を追求することも必要であり、「高校側から」みたAO入試の評価について実証的にみていく必要があると思われる。

そこで本研究では、AO入試に対する高校教師の評価について、それぞれの高校の置かれた社会的文脈および重視する進路指導との関連を通して捉えることとする。

荻谷(1981)の指摘にもあるように、学校は、社会的真空の中にあるのではなく、さまざまな影響力をもつ社会的文脈の中に存立し

ている。また、高校進路指導が、生徒の進路意識や進路選択に影響を及ぼしうるとともに、大学進学のための入学者選抜方法の選択にも影響を及ぼしうるとは言うまでもない。

また、AO入試が、先に述べたような「高校側の理解が得られ、生徒に安心して受験を勧められる選抜方法」として、「高校側から」評価されているのかについては、多々疑問視される場所である。例えば夏目(2002)は、高校側から指摘されたAO入試の問題点として、選抜時期の問題、特別指導の必要性、可否の見極めの困難さ、合格者の早期決定による周囲への影響、不合格者のダメージ、進路選択の幅を狭める、といった点を挙げている。

本研究では、中でも、その問題点として多々指摘されるものの、大学側が看過してきた「不合格」に対する高校教師の視点に着目する。

「不合格」への視点を看過することは、AO入試の形骸化につながると共に、不合格者の進路選択にも影響を及ぼしうる重大な問題であると思われる。

## 2. 調査方法

- ・調査時期：2004年7・8月
- ・調査対象：A県の全日制高校の進路指導担当教諭252名。有効回答数222名(88.1%)。
- ・調査方法：郵送調査法による質問紙調査
- ・調査項目：

### ①高校の置かれた社会的文脈

King(1973)は、学校の組織構造を分析する枠組の構築の中で、学校の活動と組織体制に影響を及ぼす学校の置かれた社会的文脈を表すものとして文脈変数を示した。本研究では、調査対象地域をあらかじめ限定しているため、人的物的資源に関するものや、その資源を条件づけるものを示す内的文脈変数のみをみていくこととする。

具体的には、教育社会学における先行研究

をふまえ、

- ・ 入学時偏差値
- ・ 現役大学進学率
- ・ 浪人・その他率<sup>2)</sup>
- ・ 設置者(公立・私立)
- ・ 共学・別学(男子校・女子校)
- ・ 三年制・中高一貫
- ・ 併設大学の有無

に焦点をあて、高校受験雑誌の資料等をもとに調査を行うこととする。

## ②調査対象校の進路指導

学校で取り組まれている進路指導は、進路指導方針や実践活動により、いわゆる「在り方生き方指導重視」型と「受験指導重視」型に分類されると指摘する研究が多くみられる(例えば、前田・仙崎・柳井 1991; 柳井・前川他 1991)。

そこで、本研究でも、それぞれの高校が、「在り方生き方指導」「受験指導」それぞれの要素を重視する程度を調査することとする。

具体的には、望月(2001)を参考に、「在り方生き方指導」としては、

- ・ 自己理解
- ・ 進学先理解
- ・ 職業観
- ・ 生き方
- ・ 保護者連携

のそれぞれを意識した指導に焦点をあてる。

また、同様に、「受験指導」としては、

- ・ 3年生の受験指導
- ・ 1・2年生の受験指導
- ・ 3年生の必須模試
- ・ 1・2年生の必須模試
- ・ 補習

のそれぞれを意識した指導に焦点をあてる。それぞれの指導に対する重視度を、5段階評価(5-「重視している」から1-「重視していない」)で回答を得ることとした。

## ③AO入試に対する評価

AO入試に対する評価として、「評価全般

(AO入試を評価できるか)」「受験促進(AO入試を生徒に勧められるか)」という項目のほか、「結果納得度(AO入試を受験した生徒の合否結果に納得できるか)」「一般入試との両立(AO入試と一般入試の両立は可能であると考えるか)」といった「不合格」への視点を捉える項目を加えた。

それぞれの項目に対し、5段階評価(5-「そう思う」から1-「そう思わない」)で回答を得ることとした。

他、AO入試に対する評価を自由記述にて求めた。

## 3. 調査対象校の概要

### 3.1 高校の置かれた社会的文脈

AO入試に対する高校教師の評価を捉える前に、本研究の調査対象校の概要として、それぞれの高校の置かれた社会的文脈について示すこととする。

まず「入学時偏差値」の平均値は51.0であり、標準的なものであることが確認された。

また、「現役大学進学率」の平均値は52.3%、「浪人・その他率」は28.3%と、全国平均に比べると若干高い数値を示している。

「設置者(公立・私立)」に関しては、公立144校、私立78校。「共学・別学(男子校・女子校)」に関しては、共学173校、男子校22校、女子校27校。「三年制・中高一貫」に関しては、三年制168校、中高一貫校54校。「併設大学の有無」に関しては、有り33校、無し189校であった。

以上の結果をふまえると、本調査の対象校は、全国的にみれば、大学進学率(現役・浪人含め)が高く、私立校や中高一貫校、併設大学を有する高校がやや目立つものであるといえよう。

### 3.2 調査対象校の進路指導

続いて、それぞれの調査対象校が重視する

進路指導に関する分析を行った。

まず、「在り方生き方指導」とみなしうる5つの指導内容に対する5段階評価をスコア化<sup>3)</sup>した結果、本研究の調査対象校の平均スコアは20.7であった。同様に、「受験指導」とみなしうる5つの指導内容に対する5段階評価をスコア化した結果、本研究の調査対象校の平均スコアは17.0であった。

近年、キャリア教育概念の導入により、高校進路指導においては「在り方生き方指導」を重視する傾向がみられるが、調査対象とした

A県でも、こうした傾向がみられた。

#### 4. 調査結果

AO入試に対する評価(「評価全般」「入試受験促進」「結果納得度」「一般入試との両立」)を目的変数とし、学校の置かれた社会的文脈および重視する進路指導を説明変数とする重回帰分析を行った。

その結果について、共線性の確認をしようとして示したものが、表1である。

表1. AO入試に対する評価の重回帰分析

	評価全般		受験促進		結果納得度		一般入試との両立	
	$\beta$		$\beta$		$\beta$		$\beta$	
男子校ダミー	-0.31	***	-0.24	**	-0.16		-0.10	
女子校ダミー	0.09		0.37	***	0.20		0.20	
公立ダミー	0.12		-0.15		-0.01		-0.07	
中高一貫ダミー	0.08		-0.35	**	-0.11		-0.45	***
大学併設ダミー	-0.03		-0.09		-0.10		-0.07	
現役大学進学率	0.25		0.25		0.18		0.20	
浪人・その他率	0.12		0.29	**	0.06		-0.14	
入学時偏差値	-0.31	*	-0.57	***	-0.34	*	0.02	
在り方生き方指導	0.01		0.00		0.05		0.17	**
受験指導	0.09		0.21		0.16		-0.10	
F値	2.92	**	6.44	***	2.05	*	5.89	***
R <sup>2</sup>	0.12		0.24		0.09		0.22	
調整済みR <sup>2</sup>	0.08		0.20		0.05		0.18	
N	218		218		209		218	

$\beta$  = 標準偏回帰係数

\*\*\*;  $p < .001$ , \*\*;  $p < .01$ , \*;  $p < .05$

以下では、それぞれの目的変数に関する分析を行う。

##### 4.1 評価全般

まず、「いかなる高校で、AO入試が評価されているのか」について重回帰分析を行った。

その結果、決定係数が十分ではないことをふまえた上でいのであれば、有意に正の相関がみられるものはないが、逆に、「男子校( $p < .001$ )」「入学時偏差値( $p < .05$ )」は有意に負の相関が示唆された。

こうした傾向は、AO入試に対する自由記

述からもうかがえる。例えば、入学時偏差値の高い男子校であるA高校からは、「AO入試そのものが、高校現場を混乱させるものであり、一生懸命やっている大学もあるが、AOそのものが評価できない」との回答が得られた。

##### 4.2 受験促進

続いて、「いかなる高校で、生徒にAO入試受験を勧めているのか」について、重回帰分析を行った結果、「女子校( $p < .001$ )」「浪人・その他率( $p < .01$ )」と有意に正の相関が示され

た。

こうした傾向は、AO入試に対する自由記述からもうかがえる。例えば、女子校であるB高校からは、「本校の場合、(国立大学には)学力的に一般入試では合格できないのが現状です。ただ、人間的にはすぐれた生徒も多くいます。AO入試は彼女らにとってはチャンスですので勤めています」との回答が得られた。

これに対し、「入学時偏差値( $p < .001$ )」「男子校( $p < .01$ )」「中高一貫校( $p < .01$ )」とは有意に負の相関が示された。

こうした傾向は、AO入試に対する自由記述からもうかがえる。例えば、入学時偏差値の高い中高一貫校であるC高校からは、「今後、AO入試は拡大していくと判断しますが、受ける側と受け入れる側の相互理解には時間がかかるものではないかと常々考えています。現状のAO入試では、うちの場合、生徒に勧めることは難しいように思います」との回答が得られた。

#### 4.3 結果納得度

続いて、「いかなる高校で、AO入試を受験した生徒の合否結果に納得しているか」について重回帰分析を行った結果、決定係数が十分ではないことをふまえた上でいうのであれば、正の相関が示されたものはなく、逆に、「入学時偏差値( $p < .05$ )」との間に有意に負の相関が示唆された。

入学時偏差値の高い高校からは、「うちの生徒の合否結果をみても、AO入試の結果には納得できないものがある(A高校)」「AO入試は多くの大学で取り入れているが、評価の基準がよく理解できず、どう取り組んだら合格できるかがアドバイスしにくい(C高校)」といった自由記述回答が多く得られた。

#### 4.4 一般入試との両立

最後に、「いかなる高校で、AO入試と一般

入試の両立を可能であると考えているのか」について重回帰分析を行った結果、「在り方生き方指導( $p < .01$ )」と有意に正の相関が示された。これに対し、「中高一貫校( $p < .001$ )」とは有意に負の相関が示された。

こうした傾向は、AO入試に対する自由記述からもうかがえる。例えば、中高一貫校であるD高校からは、「本校では、中学からのカリキュラムが一般入試に対して無理なく組まれています。こうした中で、AO入試を検討させることは、生徒や保護者を混乱させることになると思われます」といった回答が得られた。

### 5. 考察

本研究の知見は、ある県における調査に基づくものであり、一般化できるものではないが、偏差値上位校や中高一貫校では、AO入試「不合格」への懸念がみられ、AO入試の評価が低いとともに、生徒への受験も積極的には勧めていない傾向が示された。幾多の先行研究に基づくと、こうした高校では、国公立大学や理系学部を志望する生徒が多いと推測される。

また、AO入試は、志望校への意欲も問うものであり、一般入試に比べ、受験生の志望校へのアスピレーションは加熱されることが予想される。しかし、先に挙げたB高校の自由記述にもあるように、偏差値中下位校の生徒にとって、国公立大学の一般入試は、試験科目数や難易度を考えると容易ではないといわざるを得ず、AO入試で「不合格」となった場合には、不本意感や挫折感を抱いたまま、他大学へと進学する可能性が高いのではないかと懸念される。

以上の点をふまえると、「不合格」への視点は、今後、国公立大学のAO入試に関して、とりわけ意識すべきものであると考えられる。文部科学省によるデータをもとに、AO入

試の近年の志願および合否状況に目を向けると、私立大学のAO入試においては、志願者数が増加する中で、合格者数が不合格者数を上回り、また合格者数と不合格者数に大きな差異はない状態で推移している（図3参照）。

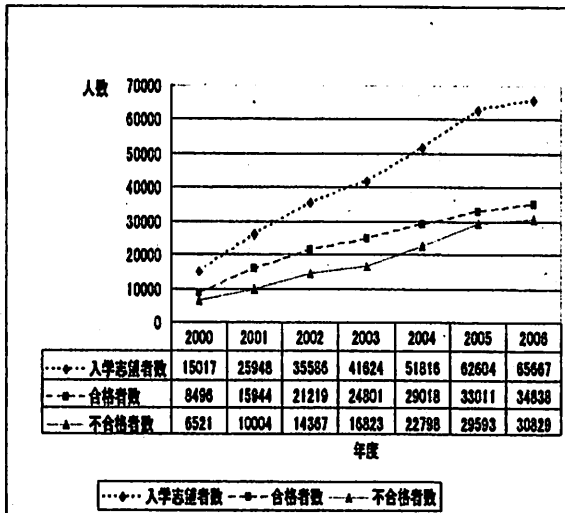


図3. 私立大学AO入試志願・合否状況<sup>4)</sup>

他方、国公立大学のAO入試においては、志願者数の急増に伴い、比例して増加しているのは不合格者数であり、合格者数はさほど伸びていない傾向がみられる（図4参照）。

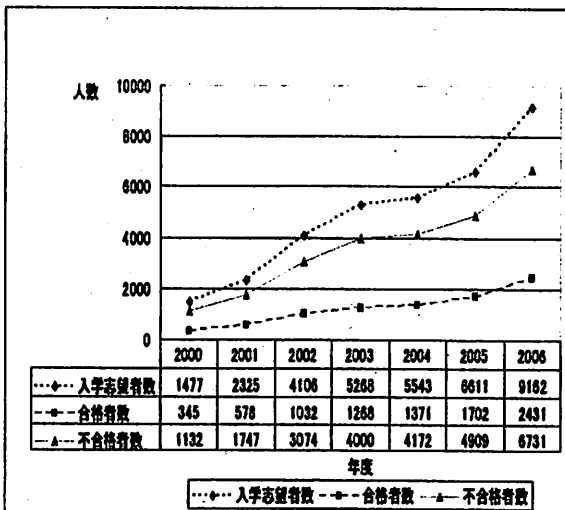


図4. 国公立大学AO入試志願・合否状況<sup>4)</sup>

しかし、河合塾（2006）による調査によれば、国公立大学でAO入試不合格者へのフォローを行っている大学は10%にすぎないのが現状である。こうした姿勢は、AO入試が高校教師からネガティブに受けとめられる大

きな要因となっているのではなかろうか。

鈴木（2005）によれば、AO入試は、その審査の過程で「自己を見つめ直す、自己の適性を選択する」という教育的な機能を持ち、一般入試にはない貴重なものであり、大学教育でのミスマッチの軽減や、学ぶ意欲を構成するメタ認知能力の育成の役割を果たすものである。こうした有用性をもつAO入試を形骸化させないためにも、大学側も「不合格」の視点を持ち、そのフォローも含め、高校との連携を進めていくことが必要であると思われる。

注

- 1) 図1・2は、文部科学省による「国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」をもとに、筆者が作成したものである。
- 2) 高校卒業後の進路が、進学（大学・短期大学・専門学校）および就職以外の者。
- 3) 例えば、「在り方生き方指導」とみなしうる5つの指導内容に対し、いずれも5（重視している）と回答した場合には、25.0（=5×5.0）としてスコア化するものとする。
- 4) 図3・4は、文部科学省による「国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」による「入学志願者数」「合格者数」をもとに、筆者が「不合格者数」を算出し、作成したものである。

参考文献

荻谷剛彦, 1981, 「学校組織の存立メカニズムに関する研究」『教育社会学研究』36:63-73.  
 河合塾, 2006, 国公立大学AO入試実施状況アンケート調査  
 King, R., 1973, *School Organization and Pupil Involvement* RKP, 1-21.  
 前田忠彦・仙崎武・柳井晴夫, 1991, 「高等学校の進学指導における指導理念・方針と

実践活動の関連」『進路指導研究』

12:36-45.

望月由起, 2001, 「高等学校における「進路指導の空洞化」に関する一考察—「生き方指導」「受験指導」への取り組みに着目して—」『日本教育経営学会紀要』43:79-91.

中村高康, 1996, 「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立—公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐって—」『教育社会学研究』59:145-164.

夏目達也, 2002, 「AO入試の現状と課題」『現代の高等教育』443:20-25.

鈴木誠, 2005, 「AO入試の光と陰—新しいAO入試創造の視点—」『月刊高校教育』24-28.

渡辺哲司, 2005, 「AO入試と大学における学習」『大学教育学会会誌』27(1):146-151.

山岸みどり・加茂直樹他, 2004, 「北海道大学AO入試—平成13年度～15年度」『大学入試研究ジャーナル』14:57-62.

柳井晴夫・前川眞一他, 1991, 「高等学校における進路指導担当教師を対象とした進学指導の実態に関する調査研究—学力偏差値を主とした進学指導の改善を中心として—」『大学入試センター研究紀要』20:93-141.

**【謝辞】**

本稿をなすにあたり、多くの高校教員の方々から調査協力をいただきました。この場をお借りして、謝意を申し上げます。